

「認知症だけど…」

グループホーム花みずき

計画作成担当者 介護福祉士 森 喜久代

今日本では、ほぼ5人に1人が65歳以上の高齢者であり、その中の13～14人に1人が認知症高齢者という割合です。最近、20歳以上の一般住民を対象として、認知症に対する意識調査を行ったところ、認知症をれっきとした病気であると認識していた割合は、およそ2人に1人であったそうです。65歳以上では、最も多い認知症の原因である、アルツハイマー型認知症について、症状まで知っていた人は、2割に満たないという結果が出ています。



認知症は様々な原因によって起きる明らかな病気であり、アルツハイマー型認知症が65歳以上の認知症の原因として最も多く、現在は医学的な治療も可能になっています。出来る限り、早く原因を見つける事は大きな意義があり、家族と同様に最も早く認知症を疑わせる変化に気づく場所にいる、関係者に求め

られる期待は大きなものです。

私は、グループホーム(認知症対応型共同生活介護)「花みずき」で、5年間認知症高齢者の方のお世話をさせて頂いています。初めて、認知症高齢者の方をケアし、「教育の中の認知症」と「現実の認知症」との、ギャップに悩まされました。しかし、認知症高齢者の方と接する中で、「認知症患者」ではなく、社会の主権者としての「1人の人間」として見る為の視点が形成されてきました。認知症高齢者の方を理解するうえで、最も重要な基礎だと思っています。

私が働いているグループホーム「花みずき」には、3ユニット(1ユニット9人)、27名の共同生活が可能な、認知症高齢者の方が入居されています。27名一人一人違った認知症症状があります。

Aさんは、2年前にご主人を亡くされ、お通夜・お葬式に出られています。食事の始まる前や、夕方になると「お父さん呼んできます」と、歩行がおぼつかないにもかかわらず、歩いて捜しにいかうとされます。私たちは、止めることはせず、納得のいくまでお付き合いをさせて頂いています。この方は、今ではご家族の方の顔も、覚えておられませんが、ご家族の方は、毎週、遠方から会いに来られています。



Bさんは、午前中は、穏やかに過ごされていますが、昼食後からは決まってスタッフの所から離れようとされず、1で行けるトイレも「何処にあるか分からないの」または「トイレの仕方が分からないの」とスタッフを離そうとされません。時には、「今からどうしたらいいの?」と、不安になられ、泣き顔になられる時もあります。不安になられないように、寄り添いのケアをさせて頂いています。

Cさんは、TVで台風・災害の情報が流れると、家の事を心配され、1日中「家は、大丈夫かしら?」と言いに来られます。スタッフは、1日も早く台風が通り過ぎる事を願うばかりですが、通り過ぎた後も、被害情報が流れますので「家は大丈夫だったかしら?」と続きます。

ご家族の方も、心配されて、手紙などで「台風はどうでしたか？」と言って来られ、またまた、混乱されてしまいます。統一した言葉がけをして、安心して頂けるようにしています。

Dさんは、入所される前は、ご家族の方が24時間付きっきりで介護されていました。夜間せん妄・徘徊・暴言・介護への抵抗があり、ご家族の方は、このような様子を側で見ていて、力で抑えたら治ると思われ、そういう事があったことをお聞きしています。入所されても何かと目の離せない状態が続き、薬剤の使用を併せてケアさせて頂き、今では、穏やかに過ごされています。薬剤も当初より極少量になっています。ご家族の方にも、今の状態になられたことに、大変感謝して頂いています。この方の笑顔は、私たちスタッフの、何よりも支えとなっています。

このような、様々な症状を持たれた認知症高齢者の方が居られますが、グループホーム「花みずき」で働くスタッフは、認知症高齢者の方がその人らしい生活をいかに続けることができるのか、何が不安の原因になっているのかどのように混乱を軽減させてあげられるのかを、認知症高齢者の方の言動をじっくり観察し、分析することで、認知症高齢者の方が、安心して穏やかな生活を送って頂ける様に、ケアさせて頂いています。